令和７年度　府立福知山高等学校三和分校　学校経営計画　（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	昨年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
＜スクール・ミッション＞ 農業科・家政科を設置する昼間定時制課程の高校として、個に応じた学びと協働学習の場を提供することにより、基礎的な学力と生きる力を身に付け、社会に主体的に参画できる心豊かな人材を育成する。 **＜スクール・ポリシー＞** ◎育成を目指す資質能力に関する方針 **「個を活かし、公に生きる人間」の育成** この推進のため特に、 ・５Ｋ力（「感じる力」「考える力」「行動する力」「向上する力」「関わる力」） ・いつの時代においても生き抜くことができる力（汎用的能力）を身に付け、地域社会の一員として、他者と協働して貢献できる力 の育成に努める。 ◎教育課程の編成及び実施に関する方針 ・地域と連携した活動を通して地域社会を理解し、社会に貢献できる力を育成する。 ・農業又は家庭の専門教育の一層の充実を図り、「汎用的能力」を育成する。 ・個に応じた丁寧な指導で、基礎的な学力と生きる力の定着を図る。 ◎入学者の受入れに関する方針 ・学習や学校行事等、学校生活に意欲的に取り組もうとする生徒 ・農業又は家庭に関する分野に関心・興味を持ち、意欲的に学ぼうとする生徒 ・本校で学んだことをもとに、進路実現に向け最後まで取り組める生徒 ・自他を尊重し、多様性を認め、他者と協働して物事に取り組める生徒	**(成果)** １　生徒自身の学習に対する意識の向上等により、全体的に落ち着いた中で教育活動を行うことができた。 ２　新学習指導要領実施最終年となり、観点別評価やＩＣＴの研究を進めることができた。 ３　進路面では、生徒・保護者との相談を継続的に行い、関係機関・就学相談員との連携を密にし、丁寧に進めることができた。 ４　コロナが第５類に移行され、行事等をコロナ前に近い形で実施すると共に、工夫を加えることで、より充実した活動になった。 ５　様々な課題がある生徒の実態把握や指導の手立てを共有化し、個別の指導計画を基に全教職員でＰＤＣＡサイクルを回すことにより、個々の生徒に応じた指導ができた。 ６　「三和分校ルーブリック」を行事や日々の活動の中で意識させるとともに、「コグトレ(学習面・社会面)」等を効果的に取り入れることにより、成果が出てきた。 ７　生産した野菜・苗、ＭＶＰ（食品加工室）で製造した加工品を校内・外での販売や地域との連携を通して、学科の特徴を発信することができた。 ８　各種コンテスト等に積極的に応募し、その結果から自信を高め、さらに挑戦する意欲が高まった。 **(課題)** １　卒業後を見据え、４年間でつけたい力の育成を目指し、教育活動全体についての教育効果を検証し、改善・整理等を行う。 ２　特別支援教育の理解と研究をより一層推進する必要がある。 ３　生徒同士の理解を深める取組を進め、互いに尊重し合い高め合える学級・学校づくりに取り組む。 ４　ＭＶＰ等の教育環境を活用し、農業科と家政科の連携をより一層強め、目標を明確にしながら、取組を推進する。 ５　ＩＣＴの効果的な活用方法も含めた授業改善及び評価方法等、新学習指導要領の理念に基づいた教育活動を一層進める。	１　基礎学力の定着 (1)　「わかる授業」を実践し、基礎学力を定着させる。 (2)　個に応じた指導により学習に対して努力を継続させ、やればできるという成功体験を通して、自信をつけさせる。 (3)　規律ある授業環境の定着を目指す。 ２　原級留置・中途退学の防止 (1)　生徒の実態把握に努め、個に応じた配慮・指導を行う。 (2)　生徒個々に目標を立てさせ、学ぶ意欲をもたせる。 (3)　基本的生活習慣の確立を促す。 ３　社会人になるための自覚を促す指導 (1)　人権感覚を磨き、思いやりをもって他者と関わることができるようにする。 (2)　販売実習や地域連携等の体験を通して、他者と協力することの重要性を認識させ、地域や社会の一員であることを自覚させる。 ４　生徒支援の研究と充実 (1)　将来社会に出ることを見据え、認知機能を高める取組を行うとともに、スモールステップで課題を乗り越えていけるように、個に応じた指導や支援を充実させる。 (2)　生徒個々の指導計画を作成し、支援を要する生徒の指導方法や授業の方法を研究し実践する。 ５　希望進路の実現 (1)　保護者、各種関係機関と連携を深め、個に応じた進路選択・進路実現を目指す。 (2)　低学年からキャリア教育を充実させ、卒業後の進路を早い段階から意識させる。 ６　ＯＪＴの推進 (1)　教職員が取組の成果や課題を共有し、改善に向けた方策を積極的に議論できる雰囲気を作り、チーム力を高める。 (2)　農業科と家政科のコラボなど、学科・教科・分掌等を超えた横断的な取組を積極的に行う。 ７　適正な学校運営と安心・安全な学校づくり (1)　危機意識や防災意識を高め、日々の点検に努める。 (2)　学校防災マニュアルにより生徒・保護者・教職員が共通認識をもつことにより、危機管理体制を確立する。 ８　家庭・地域・関係機関との連携の強化 (1)　丁寧に家庭連絡・家庭訪問を行い、家庭との連携を密にし信頼関係を構築する。 (2)　関係機関との連携・協働により、教育内容の充実を図る。 ９　府立高校特色化事業（京都フロンティア校） (1)　農業科と家政科との連携を一層強化し、活性化を図る。 (2)　発表する機会を多く設け、役割を付与することにより、主体的に考え、表現し、行動する力を磨く。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
組織・運営	・教育目標達成に向けた取組体制の確立	・学校経営計画に基づき、各分掌・学科・教科それぞれが教育目標達成に向け、一体となって進められるよう環境をつくり、取組を共有する。	B	B	・会議等を通じ、素早く事象を共有し多くの分掌において計画の目標が達成できた。 ・校内研修やセンター研修により資質向上に励み、組織的に取り組めた。
		・ＯＪＴを推進し、教職員間の密接な連携のもと組織的・協働的に業務遂行が行えるよう配慮する。	B		
	・生徒、保護者、地域のニーズに応える、開かれた学校づくりの推進	・生徒・保護者へのきめ細やかな対応により、個の特性に応じた丁寧な指導を行う。	A	A	・個々の生徒の特性に応じた丁寧な指導と教職員間での課題の共通理解により、生徒・保護者との信頼関係の構築ができた。三和分校を正しく知ってもらうため、保護者、地域、中学校等に積極的な働きかけを実施してもらえるよう努めた。
		・体験セミナー・学校説明会や学校行事、ＰＴＡ総会、各学科の取組やホームページを通して、昼間定時制や学科の特色を理解してもらう。	A		
	・生徒募集を意識した広報活動の活性化	・新聞等の掲載回数が増えるように外部機関に積極的に働きかけ、各中学校等、関係機関に学校案内や広報資料を配布する等、分校の存在や教育活動を中３生に知ってもらう機会を増やす。	A		
	・ 府立学校特色化推進事業（京都フロンティア校）に関する取組の継続発展	・各学科の取組を教職員全体での共通理解のもと支援体制を深める。 ・両学科の連携をさらに緊密なものにするとともに学校全体で地域連携・地域貢献を進める。	A	A	・学科の特色を生かし、地域のイベント参加や地域との連携を積極的に進めた。
事務部	・円滑で的確な窓口業務と分校全体を見渡した、教育環境の整備	・親切、丁寧な対応を心がけるとともに、援護制度等担任との連携を密にし、的確な事務処理を進める。	A	A	・保護者や生徒に対し、丁寧な対応ができた。 ・分掌や教科と連携し適正かつ効果的な予算執行を行った。
		・予算の有効活用と適正な会計事務を行う。	A		
	・危険箇所の早期発見、早期改修と校内教育環境の安全衛生管理	・安全点検を定例化し危険箇所の早期発見と迅速な対応に努める。	A	A	・分掌、教科と常に連携し、環境整備と危険箇所の発見・改修・危険防止措置が実施できた。
		・ゴミの分別回収と搬出、溝の消毒等校内の清潔、整理整頓に努める。	A		
教務部（図書・視聴覚）	・授業規律の確保と、基礎学力の定着	・授業を受ける５つのルールに基づき、生徒指導部・学年部･学習支援担当と連携して授業規律の確保に取り組む。	B	B	・教科担当者会議では一人一人の生徒について丁寧に確認し、課題や今後の見通しを共有することができた。 ・学習用端末の活用について研修等を実施することはできなかったが、会議の中で生徒の個々に応じた使い方を話題にし、共有することがで
		・教科担当者会議等で生徒についての共通理解を深め、丁寧でわかりやすい授業づくりを推進する。	A		
		・校内研修でタブレット端末の効果的な使い方を共有するなど、生徒の個に応じた学びについて教員の意識を高める。	B		

					きた。
	・トライの充実	・昨年度に引き続き話し合う活動を中心とすることで、話し合う力と協力する力の育成、また、リーダーシップをとれる生徒の育成を目指す。	A	A	・昨年度同様、教員が共通の目標を持って進めることができるよう、教員研修を２回実施した。生徒アンケートでは 83.4%が話し合う力が身についたと答えており、課題はあるものの一定の効果が見られた。
	・適切な観点別評価の共有	・観点別評価について、非常勤講師の先生方の理解を深め、より良い授業作り、評価につなげる。	B	B	・成績処理のタイミングで、非常勤講師の先生方に評価の確認をすることができた。
	・校務システムのスムーズな運用	・授業時数の確保､指導要録･出席簿等の表簿の適正な管理を行うことにより、教育計画の適正な実施を図る。	A	A	・曜日による授業時数の偏り解消のため、年度当初に計画的に時間割変更を示すことができた。
	・図書室の有効活用	・蔵書の充実を図り、昼休みの開館を続けることにより、より生徒に身近な存在となるようにする。また、図書委員会の活動を活性化させる。	A	A	・蔵書の充実、貸出システムの構築により、生徒が利用しやすく整えることができた。また、１～３年生に図書室オリエンテーションを実施することができた。
生徒指導部	・自己肯定感の育成及び規律ある生活習慣の確立に向けて、三和分校ルーブリックを有効活用した指導を行う	・各分掌と協力し、全ての生徒が落ち着いて、前向きに、安心して普段の学校生活や特別活動を送れる安全で規律ある環境作りを行う。	B	B	・基本的には安心安全な学校生活を送れていると感じるが指導件数が０になったわけではないため、今後も早期発見早期対応に努めていく。また、自己肯定感を育む教育という点では、自己肯定感の向上はあまり見られないため、課題が残る。 ・毎朝多くの教員が玄関で生徒の様子を見ており、その場で指導をしているため言葉遣いや身だしなみの乱れは少なかった。
		・特別活動や委員会、部活動など他者との関わる活動の中で自分の強みを見つけ、成功体験を通して自己肯定感を育む教育を行う。	B		
		・４年次の進路実現を意識し、社会性やコミュニケーション能力育成のため、挨拶や言葉遣い、身だしなみを日常的に指導する。	A		
	・納得と説得を基本とする丁寧な生徒指導を行う	・生徒個々の事情や特性、家庭の状況に配慮し、個に応じた適切で丁寧な指導を行う。	A	A	・生徒指導について、その場の指導で終わるのではなく継続指導という形で行うことができた。また、家庭との連携も図ることができた。
		・教職員全員で指導方針を共有し、本人はもちろん家庭にも理解と納得のいくねばり強い指導を行う。	A		

	・生徒会活動の活性化と自主性の確立を目指す	・体育祭や文化祭などの生徒会活動や委員会活動、クラスの取り組みを活性化させ、生徒の自主性や社会性を育てる。	B	B	・学校行事、生徒会活動、委員会活動や部活動など近年、意欲的に活動している姿が多くみられる。しかし、それにより生徒の自主性や社会性が育まれているかという点では課題が残る。
進路指導部	・希望進路の実現	・４年生との相談活動等の充実を図るとともに、家庭及び関係機関・就職支援教員等との連携を図る。 ・入試・就職試験等に向けて丁寧な指導を行い、生徒全員の希望進路の実現を目指す。 ・早い段階から面談等で本人・保護者との情報共有を行い進路の決定・実現に繋げる。	A B A	A	・４年生については生徒及び保護者との相談を継続的に行い、関係機関・就職支援教員との連携を密に、個に応じた指導を進めることができた。 ・１～３年生については個別面談の場で、卒業後に進路について指導した。 ・受験報告書の確認や違反質問への対応などに際して、人権教育部と連携して進めることができた。
	・援護制度の紹介と活用	・個々の生徒の進路希望や経済的な課題等をより早期から丁寧に把握し、進路にかかわる費用や援護制度に関する情報を適切に提供する。	B	B	・４年生については４月の保護者面談時に「学生支援機構奨学金」をはじめとした支援制度についての情報提供を行った。
	・教員の進路指導力の向上	・就職指導等に関する教職員研修を実施する。	A	A	・１学期に教職員研修を行い、高卒採用やキャリア教育の実践について共通理解を図ることができた。
保健部	・感染予防対策の推進	・感染の動向を踏まえた感染予防対策への指導を推進し、意識の向上と定着を図る。 ・CO_2 モニターを活用した教室内の換気の取組など、保健・環境美化委員会とも連携した活動を進める。	A	A	・感染動向について職員会議や職朝でのタイムリーな情報提供ができた。 ・CO_2 濃度測定の見える化により、生徒・教職員の換気意識が向上した。
	・健康教育の推進	・健康診断における事後措置の充実を図り、必要に応じて個別指導を行う等、学年部と協力して受診率の向上を目指す。 ・心身の健康に関わる保健指導の充実を図る。 ・ほけんだよりを発行し、心身の健康について生徒の興味関心に繋がるよう内容等を工夫する。	B	B	・学年部と連携し本人・保護者へ受診を促したが、受診率32%と低かった。健康意識の向上や医療機関受診の必要性の理解について課題が残ったため、引き続き粘り強く取り組んでいく。

	・教育相談活動の推進	・教職員間の“報・連・相”及び専門機関等との連携により、生徒・保護者へのタイムリーな対応に努める。 ・生徒・保護者理解についての教職員研修を実施する。	B	B	・学年部と連携し、生徒・保護者をスクールカウンセラーにつなげることができた。教職員研修は実施できなかった。
	・環境美化活動の充実	・学習環境が清潔に整然と保たれるよう保健・環境美化委員を中心に呼びかけを行い、学年部・事務部と協力して福知山市のゴミ分別を徹底する。 ・環境整備活動の片付け等に委員会として取り組む。	A	A	・保健・環境美化委員としての自覚と責任感を一人ひとりが持ち、活動に意欲的に取り組めた。
	・安全点検の強化	・生徒と教職員による校内の安全点検を実施し、学習環境整備の見える化を進める。 ・学校防災について教職員研修を実施する。	A	A	・安全点検の結果を見える化し、事務部と連携して危険箇所の補修や整備ができた。 ・学校防災に関する教職員研修を継続的に実施し、危機管理意識が向上した。
人権教育部	・人権意識の高揚と、自他を尊重できる集団づくり	・担任と連携を密にし、日常的に生徒の動きに目を配り、問題の早期解決に努める。	B	B	・できるだけ担任とのコミュニケーションを取るように心掛けた。 各学年で生徒向けの人権学習を実施することができた。
		・他分掌と協力し、生徒対象の人権教育を計画的に実施する。また、いじめやからかいなどの問題について、生徒指導部、学年部と連携して対応する。	A		
	・きめ細かな、就・修学援助	・各種奨学金等について、保護者・担任・事務・各関係機関と連携を図り、速やかに案内や指導、申請をする。	B	B	・募集が来た際には、関係学年の担任を通じて、速やかに生徒に知らせることができた。
	・教職員の人権意識の向上	・教職員対象の人権講演会を実施し、様々な人権問題についての理解を図る。	A	A	・１学期に教育委員会作成のビデオで性的マイノリティについての研修、２学期に外部講師による人権問題についての研修を企画することができた。
学習・特別支援	・生徒の実態把握と支援体制の整備	・担任、教科担当者との連携を密にし、面談の機会を利用するなどして生徒の実態把握に努め、必要な生徒への具体的な支援目標と方法を検討する。	A	A	・担任との個人面談等で具体的に個人の目標や支援方法を検討し、保護者面談において、保護者と生徒で確認をした。 ・年間６回の特別支援教育連絡調整会議を行い、校内での情報共有をもとに、生徒の支援について相談し、同じ方向性で指導できた。
		・特別支援教育連絡調整会議を開催し、支援を要する生徒の特性・問題状況の確認及び支援員の配置の調整等を行う。 ・必要に応じてケース会議等につなげていく。	A		
			A	A	

	・個別の指導支援	・個別の指導計画作成にあたり、担任や教科担当者と協力し、アセスメント表の作成・充実を図る。 ・個別の指導計画は、本人・保護者の思いを踏まえて作成し、互いに共通理解が図れるよう連携・相談を進める。	A	A	・個別の指導計画を作成し、定期的に指導計画の追加訂正を行い、支援の見直しや、面談等で活用した。コグトレの実施状況も情報共有したが、活用とまではいかなかった。
		・コグトレを活用し、活性化会議とも連携しながら生徒への支援につなげる。	B		
	・指導支援方法等や生徒理解に関する教職員の資質向上	・生徒の得意と苦手を理解した指導を進めるため、早期からの巡回相談の活用を目指す。担任との連携の強化や、家庭・本人へ支援のための情報を提供し、分かりやすい説明の充実を図る。	A	A	・生徒の様子について担任・教科担当者との情報共有をもとに巡回相談につなげ、今後の支援について考えることができた。 ・巡回相談をもとに関係機関との充実した教職員研修を行うことができた。
		・関係機関、校内の関係分掌と連携し、生徒理解を深めるための教職員研修会を実施し、特別支援教育について正しく学ぶ機会の充実を図る。	A		
	・移行支援の充実	・中高連絡会や個別の移行支援シート等をもとに、必要に応じて本人・保護者との入学前面談を実施し、切れ目のない支援を目指す。	A	A	・移行支援シートをもとに、入学前面談を行い、学校生活における支援について、保護者・本人と確認することができた。 ・他分掌と連携し、卒業後の進路の選択の相談ができた。
		・進路指導部と連携し、福祉的就労について生徒・保護者への情報提供を進め、関係機関とも連携し、必要に応じて発達検査等を勧めながら、卒業後を見据えた指導の充実を図る。	A		
学年部	・確かな人間力の向上 ・生徒が集中できる授業環境の確立	・毎日の挨拶や言葉遣い、読む力、丁寧な字を書く力、時間厳守など社会で必要とされる力を向上すること、生活改善も含め、日頃の指導を徹底する。	A	A	・三和分校ルーブリックを活用し、各行事・学期ごとに目標を選定し、振り返ることにより、社会で必要な力の確認をした。 ・自立活動の一環として生徒の整理整頓を促し、教室の美化に努め、学習環境を整えた。
		・授業を受ける５つのルールの定着を目指し、統一した指導を徹底するとともに教室の整理整頓、美化に努める。	B		
	・希望進路の実現	・４年間を通して、進路への意識を高め進路実現を目指すために、生徒に適切な情報を提供する。また、低学年からの進路指導を推進するために進路指導部と連携して１～３年生の個別進路面談を実施する。	A	A	・進路指導部や各学科と連携し、学年に応じた進路学習やガイダンスを行い、早期から進路実現への意識を高めることができた。 ・アルバイト等の就労体験により、職業や、対人コミュニケーションの重要さへの意識が高まった。
		・アルバイト等の就労体験を奨励し、進路指導部、生徒指導部、特別支援教育コーディネーターと連携を図り、個に応じた指導をする。	A		
	・情報の共有	・面談や家庭連絡を丁寧に実施し、個々の生徒の課題や特徴を把握し、日々の指導において、効果的で迅速な対応をする。	A	A	・教員間の情報共有を学年会や特別連絡調整会議で行い、生徒たちの状況に応じて対応することができた。
		・日頃から生徒に対する教職員間の情報共有を図り、個々の生徒の共通理解に努める。定期的に学年部会を行	A		

		い、担任間の意思疎通を行い、統一した指導を徹底する。			
	・研修旅行の実施	・生徒とともに準備し、安心・安全で楽しく充実した研修旅行を実施する。	B	B	・楽しい修学旅行が実施できたが、温暖化により、時期を検討する必要がある。 ・事前学習も含め、生徒の平和への意識が高まった。
		・事前学習を行い、教育的効果を高める。	A		
農業科	・農業に関する専門知識や技術の学習を通して、「生きる力」を身につけていく	・各学年の生徒の実態に応じた学習内容を検討し、指導方法の工夫をする。また、一人１台の iPad の導入による利用方法の研究をさらに進める。	B	B	・iPad の活用はほぼできたが、利用方法のさらなる研究はできなかった。 ・学年によっては能力向上につながった生徒もいる。
		・実習では体験的で実践的な授業を通して、生徒にチームワーク、コミュニケーション、プレゼンテーションの能力向上を図る。	B		
	・地域連携の推進	・農場生産物の販売を積極的に行い、地域から必要とされる農場運営を行う。	A	A	・福知山市・関係団体・地元企業・三和学園・三和こども園等との連携ができた。 ・次年度は、販売等において生徒の参加の機会を増やしたい。 ・企業連携の取組を充実させることができた。次年度は今年度の取組を発展させたい。
		・福知山市や地域の企業と連携した取組を充実させる。	A		
	・希望進路実現のための資格取得等への取組	・校内行事や府連各種行事に積極的に取り組み、農業クラブ活動の更なる活性化を目指す。	C	C	・意欲的に資格取得に取り組める指導をしていく。 ・受験料・講習費用が高騰しており、受験を勧めることに躊躇することも出てきた。 受験料・講習費用が比較的安価な資格を検討していきたい。 ・例年に近い大会数に参加することはできたが、結果を残すことができなかった。
		・資格取得に挑戦する生徒を増やす。	C		
	・家政科との連携	・家政科との連携をさらに深め、今まで行ってきたコラボ授業や合同授業の充実を図る。 ・加工室の利用について家政科と連携を図る。	B	B	・材料の提供はできたが、コラボ授業等は実施できなかった。
家政科	・基礎的な知識・技術の定着	・実習等を通して基礎的・基本的な知識・技術の修得を図り、学習したことを実生活に活用する意識や態度を養う。 ・担任・保護者と連携し、衛生的に実習ができるよう指導する。	B	B	・定期考査ごとに実技テストを実施した。意欲の向上と技術の習得に効果があった。 ・衛生的に実習するために本

		・生徒１人一台の学習用端末を活用し、生徒の特性に応じた活用を推進する。	A		人・保護者と継続して面談した。引き続き粘り強く取り組んでいく必要がある。 ・生徒の実態に応じて、各科目や家庭クラブ活動で学習用端末を活用できた。
	・社会とつながる教育活動	・販売実習や社会人講師活用事業、地域の保育・福祉施設での実習を通じて、社会とつながる教育活動を展開する。	A	B	・保育園・福祉施設でのふれあい体験や販売実習等により、他者とコミュニケーションをとる経験を積んだ。行事ごとに振り返りを行い、自己の課題に気付く発言も見られるようになった。 ・“相手に聞こえる声の大きさ“を目指し指導を継続しているが難しい。引き続き粘り強く指導する必要がある。 ・マーマレードコンテストに関する３年間の取組を総括し、探究エキスポで発表した。専門科目の学習と家庭クラブ活動をリンクさせ、効果があった。 ・資格取得に意欲的に取り組ませることができた。また、上位級に挑戦する生徒が他の生徒に良い影響を与えた。（合格率 87.5%）
		・家庭クラブ活動を通してあいさつや適切な言葉かけの経験を積み、自信をもって他者とコミュニケーションがとれるよう指導する。	B		
		・各科目の授業と家庭クラブ活動を組み合わせ、教育効果の向上を図る。（資格取得、コンテストへの挑戦）	A		
	・農業科との連携	・これまでの取組をさらに進め、学校設定科目「みわまるごと加工実習Ⅰ・Ⅱ」、「フードデザイン」等、食品加工室を活用した授業を展開する。 ・農業科との販売実習を計画・実施する。	A	A	・販売実習を 12 回実施した。段取りをする力やコミュニケーション力が向上し、社会とつながる学習の機会となった。農業科とのコラボピザが（加工技術、地域からの期待等）定着してきた。 ・食品加工室をスムーズに運用するために、定期的に打ち合わせを実施した。学校薬剤師のアドバイスにより水質検査を取り入れ、生徒にも定着できた。 ・調理部と園芸部共同で文化祭の展示ができた。
		・HACCP の考え方を取り入れた衛生管理のできる食品加工室運用に取り組む。（衛生管理と品質管理）	A		

学校関係者評価委員会による評価	・新聞や地域メディア、SNS 等を通じた情報発信が継続的に行われており、三和分校の教育活動が広く地域に伝わっている点は高く評価できる。生徒の取組が外部から認められることで、自己肯定感や主体性の向上につながっている。 ・農業科・家政科の特色を生かした教育活動や地域との連携が着実に進められており、実践的な学びの充実と地域貢献の両立が図られている。今後も地域との協働を通して、生徒の成長を支える取組の継続が期待される。 ・多様な生徒に対応するための支援体制づくりや教職員間の連携が進められており、生徒一人ひとりに寄り添った教育が実践されている点は評価できる。引き続き組織的な支援体制の充実が求められる。 ・生徒募集や学校の魅力発信においては、学校の特色や強みをより分かりやすく伝える工夫が期待される。地域や中学校との連携を一層強化し、学校の認知度向上につなげていくことが望まれる。 ・本校及び附属中学校との連携については、教育活動や学びの共通性を意識した取組を検討することで、より一体感のある学校づくりにつながると考えられる。
次年度に向けた改善の方向性	・多様な生徒の実態把握を一層進めるとともに、特別支援コーディネーターを中心とした校内連携体制を強化し、組織的かつ継続的な支援の充実を図る。 ・特別支援教育に関する校内研修や事例共有を充実させ、全教職員が共通理解のもと、具体的な支援につなげる取組を推進する。 ・生徒同士が互いを認め合い、安心して学べる環境づくりをさらに進めるとともに、学年・分掌間の連携を強化し、学校全体での生徒指導体制の充実を図る。 ・農業科・家政科の特色を生かした教育活動の連携を深化させるとともに、施設・設備の有効活用を進め、実践的な学びの質の向上を図る。 ・ICT の効果的な活用と授業改善を一体的に進めるとともに、学習評価の工夫を図り、生徒の資質・能力の育成につながる教育活動を推進する。 ・生徒募集や広報活動の充実を図るとともに、地域や関係機関との連携を一層強化し、地域に信頼される学校づくりを推進する。